みのむかし話

その1

高永山本門寺のむかし話

三位さんと大坊あかずの門

大坊の山門を入ったところに三位さんと呼ぶ石塔がある。三位さんとは、正親町三位三条実蔭（讃岐佐）のことで、この人が住んでいた屋敷跡が大坊の境内で、八町（八万平方メートル）あったと古老はいう。この三位さんに「南無妙法蓮華経」と題目を唱えて拝み、その線香の灰をいぼに塗ると、いぼが取れると言っている。この古塔を転法輪三位大菩薩という人もある。実蔭は正親町三条家の祖三条公氏（実房の嫡男）の子、閑院正三位行参議であったという。

大坊と三条家は深いえにしの糸で結ばれていたようだ。大坊は三条実蔭の屋敷跡で、その菩提寺でもあるので、正三位の位を授かり、そのため大坊の上人は駕籠に乗ることを許され、駕籠に乗ったままで善通寺の大門や関所なども素通りできたと言われる。

この山門を通称「あかずの門」と言っている。乙田山騒動の時、大坊の上人や、中の坊十一代安住院日観上人の激励鞭撻により、村民が協力して行動した。その結果、乙田山が三等分され、山が少なく、薪や下草の不足で悩んで来た下高瀬にも配分されたので、喜びかつ感激した村民がこの山門を寄付した。ところが、当時は京極家多度津藩の大門より規模が大きかったので、これを見た藩主が驚いて、「この山門は寺に過ぎた門である。故に特別の行事のない平時は決して開けてはならない」と命じた。以後、仰せの通りにしたので、あかずの門と呼ぶようになった。

また、大坊本堂の敷地は、周辺の地より一段高いという。これは本堂構築に際し、法華講中の信者たちが前掛けや風呂敷に土砂を入れて運び、土地を高くしたためだと言われている。

参考文献三野町誌昭和五五年発刊一〇三五P

高永山本門寺　山門

三条実蔭公　墓所